

# 西野 強 中世古典学に於ける一条兼良の研究

学位請求論文

## I 論文要旨

西野 強

### 一 はじめに

一条兼良の古典学は、従来の流派における伝統から形成される古典学と比較すると、その伝統から離れた独自性がある。後世、その姿勢が評価され今日まで注釈書類の評価は高い。その注釈書として『伊勢物語愚見抄』『花鳥余情』『古今集童蒙抄』があり、幸いにそれぞれ自筆本が現存する。しかし、大成させたのは、何れも文明期あたりの晩年、応仁の乱以後となる。それ以前の古典学の記録は残るが僅少で、その実態は、源氏学以外に、余り明らかにされていらないと思われる。本論において、兼良がどのようにして伝統的な世界から新たな古典学を形成したのかについて、一〇節を

第二章 古今三鳥剪纸伝授の研究と兼良の注釈精神  
第三章 『花鳥余情』の推敲過程と兼良の源氏学  
に分けて述べたところである。

### 二 兼良の初期古典学と歌壇への対抗

兼良は、宝徳二年（一四五〇年）十一月の『仙洞歌合』における判者をめぐって、飛鳥井祐雅（雅世）の批判に合うことが『東野州聞書』に記される。その理由として「和歌の道の御口伝なき事を法印難じ申せしなり」とある。兼良は、それ以前に『新統古今集』の序文を執筆し、歌合の判者も行っていたが、歌壇の中においては異端者であったことが窺われることとなる。この『新統古今集』は足利義教の専制政治下で作られ、兼良が慕う冷泉家は、不遇の時代であった。しかし、嘉吉の乱によって義教が殺害されることで、政治や歌壇に転機が訪れる。

この機会を経て、兼良は自邸にて『嘉吉三年前撰政家歌

合」を盛大に行う。これは衆議判であるが、後日、兼良が判を加える。次に宝徳二年一月に行われた『仙洞歌合』は、前述の批判を受けて兼良と祐雅との共判となり「勝・敗・持」の判断がお互いに異なる場合が多い。

この両歌合は、兼良や今まで冷遇された歌人たちによって新たな新風を起こした。その方法として、『源氏物語』を判詞に用いることと、定家崇拜の中で、その父である藤原俊成の詞を活用することである。両歌合の判詞の中で記されるのが『六百番歌合』における俊成の「源氏見ざる歌詠みは遺恨ノ事也」である。もう一つが俊成による評語「艶」である。この両者を巧みに使い判をする。『前撰政家歌合』では、飛鳥井家や二条派の詠歌の時に、衆議判の中で『源氏物語』について語り合いながら判を行い、特に克孝への批判を強くしている。

以上のように兼良は、歌壇における伝統に対抗して、歌合の中で、歌道ではなく『源氏物語』を論じることで新たな古典学の世界を歌壇の中で広めてゆく。

兼良自身が歌道家となるためには、古今伝授を受けなくてはならない。そこで、応仁の乱以前の新材料となる専修大学図書館蔵の『古今三鳥剪紙伝授』を見いだした。『古今三鳥剪紙伝授』は従来から仮託書とされてきた。しかし、専修大本の奥書に「寛正三年孟春 兼良在判」とあることで、応仁の乱以前、寛正三年（一四六二年）正月、六一

歳の時の著書となる。同書の伝本と本文の検証を経ると、専修大本の文末表現には、他伝本に「なり」とあるところが「ならし」「なるべし」とある。また他本にはない「とぞ」を多用する。「ならし」「なるべし」は強い断定をさける婉曲表現であり、読者となる相伝者を意識させる。一方で「とぞ」は間接話法となり兼良の師匠の存在を示す。この両者の文末表現により授受関係が形成される。しかし、兼良には師匠の存在がないことが『東野州聞書』や『梅庵古筆伝』などに記されている。『古今集』注釈または歌道を知る上では、伝統に基づいた師弟関係がなくてはならない。そこで、当時の歌壇に対して、その存在を示す為に、「とぞ」を用いて師匠の存在を偽装したと考えられる。以上の文末表現を駆使して、歌道の伝統の則らせたと考えるに至った。したがって、応仁の乱以前の兼良は、歌壇を意識しながら古典学の普及に尽力を尽くしたようである。

### 三 古今三鳥剪紙伝授の研究と兼良の注釈精神

『古今三鳥剪紙伝授』は、先学により伝本と成立過程がほぼ整理されたが、不明とされるところが多かった。まずは本文研究を行い、成長過程を明らかにした上で、一二類に分類されている系統を、本文の成長過程により「寛正三年本系統」「前期成立系統」「後期成立系統」と整理した。その中で、兼良の手によって成されたのは専修大本の「寛

「正三年本系統」のみで、それを後世に別人が前期と後期へと成長させた。その原初となる専修大本自体に兼良の応仁の乱以前の古典学に対する姿勢が窺われ、禅学や漢学に基づいた新たな注釈精神を築いたようである。従来、特に『古今集』注釈においては荒唐無稽であろうと、様々な説話や解釈がなされてきた。しかし、兼良は、わからないものはわからず、資料によって、説が分かれる場合は、両説を挙げ、中立とする精神を説いた。そして、注釈において、当時まだあまり流布していなかった『徒然草』を用いる。それは静嘉堂文庫に所蔵する正徹本との関係がある。正徹と親交が深かった兼良は、正徹によって『徒然草』の存在を知り、用いたと思われる。以上のように兼良の学問は、周辺の親交による文献から影響を受けて、新たな古典学の世界を築いた。

『古今三鳥剪紙伝授』は本文異同を見ると前述したとおり三段階の成長過程がある。本文異同を検証した結果、三系統が順々に成長したのではなく、「寛正三年本系統」を基にして、「前期成立系統」が成立し、この両者を基にして「後期成立系統」が成立した。しかし、前期と後期との間には、過渡期となる第八類の宮内庁書陵部本と、第七類のノートルダム清心女子大学本がある。この両者が、間に入り成長した。全諸本の中で、専修大学図書館蔵本は、原初形態を知る重要な伝本であることを鑑みて翻刻をし、本

文差異を知る一助として「内閣文庫本」との異同を付した。

#### 四 『花鳥余情』の推敲過程と兼良の源氏学

兼良の古典学は、源氏学が中心となる。その集大成として『花鳥余情』を文明四年（一四七二年）に成立させる。『花鳥余情』は伝本により「初稿本」「再稿本」「献上本」と分けられ、成長過程が明らかにされている。しかし、天理図書館蔵の伝兼良等筆『花鳥余情』を調査したところ、兼良筆と極められた冊（一四冊分）に限り、前記の三系統とは異なる注釈がある。まず本文系統を見ると、従来、天理本は「初稿本以前の草稿本」とし「初稿本」と考えられていたが、それは違い「再稿本」である。特異な箇所には「初稿本」の本文も混在しており、そこに除去記号を付すところが数カ所あり、考察した結果、天理本は「初稿本」と「再稿本」との間に入る草稿本と位置づけた。

天理本の性格が明らかになることで、『古筆学大成』に掲載されている伝兼良筆「源氏物語注釈切」の三葉について言及をした。その断簡には、『花鳥余情』の現存諸本にはない注釈が含まれている。また、専修大学図書館の古筆手鑑にも一葉、書誌形態こそ異なるが同様の性格の伝兼良筆「源氏物語注釈切」があり、何れも内容上、『花鳥余情』との関係がありながら、異同があり、その断簡とはならない。しかし、前記の天理本『花鳥余情』にも諸本にない注

釈が含まれる。これらの特異な注釈に共通することは『河海抄』から転載した内容という性格であった。まずは、天理本の存在により「源氏物語注釈切」は、兼良が『花鳥余情』を推敲する様子を知る資料と見ることができ、推敲方法として、天理本と古筆切の存在から、『花鳥余情』が「初稿本」から「再稿本」へと成長させる時に、改めて『河海抄』を座右に置いて増補を行い推敲し、初稿本から再稿本を作成したことを明らかにした。なお、天理本の兼良筆には、推敲跡となる除去記号がある箇所を抄出して翻刻を行った。

##### 五 おわりに

以上のように、嘉吉の乱以後から応仁の乱以前、初期の兼良の古典学を明らかにし、室町時代の古典学の中で、異質でありながら後世に大きな影響を与えた要因を明らかにした。また、歌道伝授のない兼良が歌学の伝統に対して、どのように対処をしたのかを、特に飛鳥井家との関係から見出した上で、古典学の形成にどのように関わったのかを示した。次に従来より『花鳥余情』が推敲を重ねて再稿本などを作成していたと考えられていたが、それを具体的に示した。なお、本論では、『古今三鳥剪纸伝授』と天理本『花鳥余情』の新資料を基に書誌的に検討をして、その資料の必要性を説いて、兼良の古典学の方法について考察を

行った。

## II 審査報告

審査委員

(主査)

専修大学文学部教授 小山 利彦  
 専修大学文学部教授 板坂 則子  
 東京経済大学経済学部教授 小町谷照彦

本論文は中世の碩学一条兼良の古典学研究について、『古今和歌集』と『源氏物語』の注釈を中心に三章にわたり、研究成果をまとめている。『古今集』については本学図書館所蔵の『古今三鳥剪紙伝授』と、『源氏物語』についても本学図書館所蔵古筆手鑑『墨跡彙考』所収の伝兼良筆「源氏物語注釈切」を用いて、両文献に関わる初めての研究論文である。一条兼良研究に加えて、新たな文献を紹介・研究を重ねることで、より精緻な兼良の古典学についての姿勢を明らかにしている内容となっている。

第一章「兼良の初期古典学と歌壇への抵抗」においては歌合や往時における歌壇史を究明することで、兼良の影響を考察している。その上で兼良筆という奥書を存する、本学所蔵『古今三鳥剪紙伝授』の内容検証によって、兼良の古典学へ対する意識を明らかにしている。中世において歌合判詞では、『源氏物語』を歌合判詞として用いることは少な

いと見なす。そうした状況に対する兼良の対応を究明している。『嘉吉三年(一四四三)前撰政家歌合』と『宝徳二年(一四五〇)十一月仙洞歌合』において兼吉は判詞に関わっていて、歌合における判として『源氏物語』を基準にする姿勢を示している。本論文ではこうした和歌史上の指摘に留まらず、基底にある兼良の思考・意識について考察を深めている。二つの歌合は将軍足利義教が殺害された嘉良の乱による政変後に成立している。この政変は歌壇にも影響を与える。歌壇において指導的立場にあった飛鳥井家と二条家に代わって、以前には衰運をかこっていた冷泉家が復興する転機にもなっている。兼良は貴族としての頂点を極めていたが、飛鳥井・二条両家の歌道とは相容れないところがあった。義教在世中には『新統古今集』の序を冠し、歌合の判も務めているが、やはり兼良は当時の歌壇からは離れた位置に立っていると見做している。嘉吉の乱の後、兼良は政治的にも歌壇においても活動が活発化している。自らが主宰した『嘉吉三年前撰政家歌合』で判を加えている。『仙洞歌合』の判者として、『東野州閑書』によると飛鳥井雅世と対立し、歌道における御口伝が無いことを批難されている。

本論文では兼良が新たな歌風として、『源氏物語』を判の基準に据えていることを指摘している。当時の歌壇では藤原定家を主軸に位置付けているのに対し、俊成が主唱す

る『六百番歌合』の「源氏見ざる歌詠みは遺恨ノ事也」や「艶」という言説を注視している。歌学における伝統思考に対して、『源氏物語』を主座に据えることで兼良の古典学が形成していることを注視している。

兼良は歌道の最高権威として古今伝授が関心事となる。

その証左となる新資料を見出している。専修大学図書館所蔵『古今三鳥剪紙伝授』がそれである。その奥書には

寛正三年孟春 兼良在判

とあり、寛正三年（一四六二）六一歳の著作ということになる。『古今三鳥剪紙伝授』に関する伝本と本文を検証する。他伝本では「なり」で結ぶ文末が、専修大学本において「ならし」「なるべし」となっている。また他伝本と異なり「とぞ」を多用している。このことは専修大学本が文末を強い断定ではなく婉曲表現で語るといふ、相伝の場を想定させ、兼良の伝授する師の存在を匂わせるのが、「とぞ」という表現である。これは古今伝授を思わせるのであるが、『東野州聞書』や『梅庵古筆伝』に拠るところでは先師というような存在はないものと推測している。そこで本論文ではこうした文末表現を、伝授を匂わせる偽装と推測している。伝統的な歌壇を意識しつつ古典学への形成を試みているものと解釈しているのである。

第二章「古今三鳥剪紙伝授の研究と兼良の注釈精神」においては、本文系統の分類と成立過程、そして専修大学本

の位置付けや兼良の古典学へ姿勢を究明している。分類については一分類の系統を探り、本文の成長過程から「寛正三年本系統」「前期成立系統」「後期成立系統」と体系づけた上で、兼良が直接まとめたものは専修大学本の「寛正三年本系統」のみで、後世の別人によって「前期」「後期」へと変化したと見做している。専修大学本では兼良の応仁の乱以前の古典学への姿勢が示されていると見る。その特質は、不明の場合は不明のままに、その説が分かれる時はそれぞれの立場を並記する姿勢をとっている。さらに『徒然草』を注釈の拠り所ともしている。本論文では正徹との親交関係を重視し、静嘉堂文庫に所蔵される正徹本との関わりを想定している。この例を含めて兼良の古典学における姿勢を伝統を継承するのみではない、周辺の新たな見解をも加味して、講釈するという主張を展開している。

『古今三鳥剪紙伝授』は伝本を一一類に分類しているが、その成立事情について本論文では「寛正三年本系統」がまず成立し、それに基づいて「前期成立系統」が成立し、この両系統を基にして「後期成立系統」が整えられている。さらに吟味して「前期」と「後期」の過渡的な写本として、第八類の宮内庁書陵部本と、第七類のノートルダム清心女子大学本があることを指摘している。専修大学図書館所蔵『古今三鳥剪紙伝授』を初めて翻刻を試みている。この本文は同館では内題により『古今集小切紙傳』として所蔵さ

れている。二聖六歌仙のこと、三木一草のこと、三鳥のことなどが記され、末尾に「寛正三年孟春 兼良在判」とある。翻刻の下端には「内閣文庫本」を対校させている。内閣文庫本の奥書には、

右此三木三鳥一條禪閣兼良公之御自筆ヲ書写畢可  
秘々々

他見堅ク無用之事也

と記し留めていることを付記し、解題を加えている。「箱伝授」についても検討を加えている。古今伝授に関して本学図書館所蔵の写本を紹介・検証を試みているが、このような研究は数も多くない。また日本文化に関わるテーマに拡大する内容も有している。今後の多様な発展を望まれる分野である。

第三章『花鳥餘情』の推敲過程と兼良の源氏学』は専修大学図書館所蔵古筆手鑑『墨跡彙考』所収古筆切「伝一条兼良筆源氏物語注釈切」を発端にして研究を深めている。「源氏物語」の注釈は兼良にとって単なる注釈対象古典には留まらない。兼良の「一條禪閣」としての貴族社会最高の地位の精神的支柱となっていたのが源氏物語注釈であり、日本書紀講義である。その源氏学の中軸となっているのが『花鳥餘情』である。その成立は文明四年（一四七二）のことである。その成立事情については現段階で「初稿本」「再稿本」「献上本」という成立過程が明らかになってい

る。論者が実際に天理大学附属天理図書館所蔵の伝兼良也筆『花鳥餘情』を検証してみた結果、前掲の三系統とは異なる注釈が混入していることに気付いている。その天理本は、「初稿本以前の草稿本」と見做されていたが、本論文では「初稿本」以後、「再稿本」以前の草稿本と想定する根拠は「再稿本」の本文を主として、「初稿本」の本文と独自本文が混在しているからであり、草稿として、そのような箇所と同筆にて除去記号が付されていることから、「初稿本」と「再稿本」の間に位置する写本と見做している。

他にも『古筆学大成』に所収されている三葉の伝兼良筆「源氏物語注釈切」があった。その断簡には『花鳥餘情』と関係があるものの、本文が現存諸本と異質の本文が含まれている。本学図書館所蔵の『墨跡彙考』に所収の伝兼良筆「源氏物語注釈切」も異質な本文が含まれている。前掲の天理大学附属天理図書館所蔵『花鳥餘情』にも他本にもない注釈本文が含まれていることがわかる。さらに検討すると、これらの注釈に共通することは、四辻善成著の『河海抄』との関わりである。結局「源氏物語注釈切」は天理図書館所蔵本の存在により、兼良が『花鳥餘情』を推敲する様相を読みとることができる。本論文では「初稿本」から「再稿本」へ移行するに際して『河海抄』を用いて増補を行っていることを想定しているのである。

論文篇に加えて本論文では「専修大学図書館所蔵『古今三鳥剪纸伝授』翻刻」と「内閣文庫所蔵本の解題」を添えている。これらも貴重な成果と思われる。さらに宮内庁書陵部に所蔵される数多くの写本・文献・調度類を取り入れて解説・究明が待たれる。内閣文庫所蔵本についても、その親本を専修大学図書館所蔵本によって想定している。やはり本論文を始発にして解明できることが待たれるわけである。

論者はすでに専修大学図書館所蔵『古今三鳥剪纸伝授』についての古今伝授論を平成一六年中古文学会秋季大会において口頭発表し、『専修国文』七一・七三・七五・七八号等において論文掲載している。専修大学図書館所蔵古筆手鑑『墨跡彙考』所収伝一條兼良筆「源氏物語注釈切」についても『専修国文』第七九号で公表している。他にも室町時代の和歌注釈である『別歌百首』の翻刻・校異の共編著の刊行が進行中である。以上の論点から審査委員は本論文に対して学位を授与することが適当であると認める。

### Ⅲ 学位授与要記

- 一、氏名・本籍 西野 強（神奈川県）
- 二、学位の種類 博士（文学）
- 三、学位記番号 博文甲第四十一号
- 四、学位授与の条件 学位規則第四条第一項該当
- 五、学位授与年月日 平成十九年三月二十二日
- 六、学位論文題目 中世古典学に於ける一條兼良の研究

#### 七、審査委員

- |    |              |       |
|----|--------------|-------|
| 主査 | 専修大学文学部教授    | 小山 利彦 |
| 副査 | 専修大学文学部教授    | 板坂 則子 |
| 副査 | 東京経済大学経済学部教授 | 小町谷照彦 |